



祝・国指定100周年！楠名・重定・塚花塚古墳！

●問合せ 生涯学習課文化財保護係 ☎75-3343

今回ご紹介するのは浮羽町に所在する、朝田古墳群です。この古墳群は楠名古墳・重定古墳・塚花塚古墳・法正寺古墳・屋次郎丸古墳で構成されており、その中でも特に重定古墳と塚花塚古墳は装飾古墳として、楠名古墳は巨石を使用した古墳として全国的に有名で、大正11年（1922年）に国の史跡に指定されています。法正寺古墳と屋次郎丸古墳については削平されている部分があり、全体の大きさが不明瞭で詳しく調査もされておりませんが、楠名古墳・重定古墳（2020年11月15日号に個別で掲載）・塚花塚古墳はいずれも6世紀後半から7世紀初頭にかけて築造されたことが分かっています。

うきは市には重定古墳・塚花塚古墳の他にも日岡古墳や珍敷塚古墳など全国的に有名な装飾古墳が7基あり、そのすべてが国の指定を受けた古墳です。国指定となった装飾古墳が全国で約70基程なのでその10分の1を占めるこの地は古墳時代において装飾古墳文化が隆盛した土地であったことがうかがえます。今回は今年で100周年を迎える3基にスポットを当てて詳しく見ていきたいと思います。

まずは重定古墳です。現存長51mの前方後円墳で横穴式石室を持っており、石室の羨道部（前室や後室へ至る廊下）、前室（後室の前にある部屋）、後室（遺体を埋葬する部屋）に赤と青で同心円文や蕨手文、三角文などの装飾が沢山施されています。特に側壁に大量に描かれた靱は他では見られない特徴です。この古墳は久留米藩士であった矢野一貞が天保から嘉永（西暦1830～1854頃）にかけて編纂した『筑後将士軍談』にも記載された昔から知られている古墳ですが、開口部が常に開いており、戦時中は防空壕として使用されたことで天井が煤で黒くなり、戦後の考古学ブームで壁面を直接手で触っていたことにより残念ながら現在では装飾が見えにくくなっています。

そして次に赤、青、緑、黄と多彩な彩色で同心円文や円文、靱や三角文などの装飾が施されている塚花塚古墳です。径30mの円墳で複式構造の横穴式石室を持っており、後室の奥壁に大型の二重文蕨手文を中心にその周辺を埋めるように円文や靱などが描かれています。明治26年に開口した際に須恵器のほか金銅製金具・轡や

鉄鏃などが出土しましたがそれらは現在、見る事ができなくなっています。昭和46年に石室を清掃した際には銀象嵌の柄頭が出土しました。

最後に重定古墳の南西側に位置する楠名古墳は、塚花塚古墳と同じ径30mの円墳で複式構造の横穴式石室を持っています。装飾古墳ではありませんが巨石を用いて造られている石室は迫力満点です。また、この古墳は羨道部が長いことと後室より前室の方が大きい特異な形をしていることが特徴で、重定古墳同様に戦時中、防空壕や弾薬庫として使用されていたようです。

ところで、朝田古墳群をはじめとした屋形古墳群、若宮古墳群のほとんどの古墳に武器・武具の装飾が施されていますが、どういう意味を持つのでしょうか？これらは邪魔・辟邪の意味を持つとされており、武器・武具を描くことによって侵入しようとするあらゆるものに威嚇するという意味があったとされています。いかに古墳が神聖な場所であったかがうかがえます。

今回紹介したこの朝田古墳群は今年2022年に国指定史跡となって100周年を迎えます。重定古墳と楠名古墳が1922年3月8日に、塚花塚古墳は少し遅れて同年10月に指定されました。国指定100年の節目に、これからも守り伝えていかなければいけない使命を感じています。



楠名・重定古墳 航空写真



塚花塚古墳奥壁装飾
二重蕨手文



塚花塚古墳全景



塚花塚古墳出土
銀象嵌柄頭



楠名古墳
入口から羨道を望む